災害と社会を学芸員養成の中で考える
－地域課題をテーマとした博物館実習での展示活動と自己評価－

山内 利秋

Elucidating the relationship between disasters and society in curatorial training: Exhibition activities and self-evaluation on local issues during museum training.

Toshiaki Yamauchi

要旨

九州保健福祉大学の博物館学芸員養成課程では、博物館実習の一環として実施している企画展示において、地域社会の課題に着目した企画を取り上げている。特に 2016年の九州地方で発生した熊本地震以降、毎年災害をテーマとした展示を企画している。これは地域社会における重要な課題である災害と文化の関わりの中での博物館の役割を理解し、この取り組みに貢献する人材の育成を目指したものである。

この企画に参加してきた学生の自己評価について因子分析・相関分析・テキストマイニング分析を行った。その結果「災害の経験と理解」が展示制作技術の習得に一定の影響を与えた点、「フィールドワークの経験」が展示に求められるデザイン力に関係している点が確認された。

Abstract

The museum curator training program at Kyushu University of Health and Welfare has been featuring projects that issues in local communities special exhibitions.Particularly, in the aftermath of the Kumamoto earthquake the Kyushu region in 2016, the museum planned an annual exhibition with disasters as its theme. This exhibition an understanding of the museum' s role in the between disasters and culture, which is an important issue in local communities, and develops human resources that can contribute to this effort.

Factor, correlation and text mining analysis were conducted on the self-evaluations of the students who participated in this project. Results confirmed that one' s “experience and understanding of disasters” had some influence on the acquisition of exhibition production techniques and that“fieldwork experience” was associated with the design skills required for exhibitions.

キーワード：学芸員養成教育、PBL、災害と社会、熊本地震
Key words：curatorial training program, PBL, disasters and culture, 2016 Kumamoto earthquake

受付　2023年5月10日　受理　2023年12月7日
九州保健福祉大学　薬学部　動物生命薬科学科　〒882-8508 宮崎県吉野町1714-1
Department of Animal Pharmaceutical Science, Kyushu University of Health and Welfare School of Medical Life Science, 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka-city, Miyazaki, 882-8508 Japan

Ⅰ:はじめに

大学学芸員養成課程において実施される博物館実習は、大きく学外（館園）実習と学内（実務）実習に分かれる。文部科学省の『博物館実習ガイドライン』（2009）によると、大学内で実施される学内実習では「（１）多様な博物館の姿を観察する「見学実習」、（２）資料を実際に取り扱う「実務実習」、（３）初回と最終回に実施する「事前・事後指導」から構成することが望ましい」とされ、各大学の状況に見合った授業内容が構成されている。

筆者はこの博物館学内実習を実施するにあたり PBL（project based learning）方式での授業スタイルを取り入れ、特に地域社会の課題解決をテーマとする企画展示活動を毎年度実践し、一定の成果を挙げてきた（山内 2015 他）。こうした学修活動を推進する中で、平成 28（2016）年 4 月に筆者の所属大学のある宮崎県に隣接する熊本県・大分県において熊本地震が発生した。

平成 23（2011）年の東日本大震災発生時には日本の他地域と比較して地震津波防災に対する認識が特に教育分野において「とりのこされた」感があった九州地方においても、熊本地震以降は大規模災害からのレジリエンス(生存)に対する認識が様々な分野を通じて顕著になっていった。この姿勢は災害時における博物館分野の機能変化にも影響を与えた。

今日では＜災害を社会の中で伝え / 考え / 実践する＞という動向が各地の博物館や文化財保護分野でも生じるようになったが、東日本大震災や「3.12」と呼ばれる長野県北部地震、そして熊本地震や西日本豪雨等の被災地ではこうしたアクションが顕著になっている。特に熊本地震の直後には、筆者が知っているだけでも熊本市現代美術館・熊本市立動植物園・御船町恐竜博物館といった複数の館において、被災者の心の安定に関わる諸活動が実践されてきた[1)]。筆者自身も西日本豪雨災害（平成 30 年 7 月豪雨）で被災した愛媛県南予地方において、被災者や関係者を対象とした被災写真救済のワークショップを実施した（山内 2020:23-34）。これは写真を意識の上で「元に戻す」事によって被災者の心の安定への寄与を目指したものでもあった。

大学での学芸員養成課程においては、大規模災害時における博物館の危機管理に関わる内容は、基本的には博物館資料保存論の中で取り扱っている事例が多いと考えられよう[2)]。一方、博物館実習は多様な館種の理解や博物館の実務を学修する科目だが、この科目の中で特に学内で行われる実務実習（学内実習）でも事例は多くはないが災害を扱った展示活動が実施されている。例えば追手門学院大学では 2018 年の大阪府北部地震の被害を受けて災害から身を守る事をテーマとした展示が 2019 年に行われている（追手門学院大学広報課 2019）。また、龍谷大学では「わざわいと人々」というテーマの 2022 年の展示では、歴史資料等に見出される災害が扱われている（龍谷大学博物館準備室 2022）。これらの展示はいずれも企画段階から展示・運営まで博物館実習受講生が主体となって行われている。

地方大学では特に卒業後も所在地方にて社会人として活躍する人材を育成する役割が大きいが、＜災害から生き抜く事＞は地域社会の重要な課題としてもはや欠かす事が出来ないテーマであると考えている。本学では熊本地震が発生した 2016 年度以降、学内実習にて実施している企画展示のテーマに、＜災害＞を位置付けている。これ以前の 2015 年度までにも様々なテーマでもって展示を実施しているが、テーマの企画立案は完全に受講生に依存してきた。それに対し 2016 年以降は基本的に「災害」を扱う事を受講生に課している。

この結果、以前と比べると明らかに展示内容に強い目的を持った明確なメッセージ性と、それを伝えようとする一貫としたストーリーをうかがう事が出来、さらに旺盛な展示制作に変化したと筆者は考えている。この変容の背景には教員の側からのテーマの提示のみならず、受講生が被災地に近い場所で災害を経験した事が理由として考えられるが、実際はどうか。

本稿ではこのような特定の展示テーマへの受講生の取組みが、博物館実習受講生の学修スキル（特に企画や展示制作）にどのような影響を与えているのかを受講生自身の評価から分析してみた。

なお、本研究は九州保健福祉大学研究倫理審査委員会の承認（受理番号 :22-023）を得ている。

Ⅱ:災害を学芸員養成の企画展示の中で考える

1.博物館実習でのPBLと熊本地震の発生

博物館は様々な研究分野・方法から過去の災害にアプローチし、将来の災害の備える必要性を人々に伝えてきた。さらに東日本大震災以降、博物館は被災した人々や広く地域社会に関与し、地域課題に対峙するようになってきている。大規模災害が多発し今後も予測されている今日において、我々博物館に関わる者は災害と社会との関係、社会は災害からは逃れられない事を受容しつつ、その上で博物館という場において考え続けていく意識と継続性を持つ必要性が生じていると言っても過言ではない。そして、特に大学学部段階で学芸員養成科目を受講

する学生が将来において博物館専門職・広く社会人として活動する際の重要な課題として、この「災害から逃れられない社会」と長く対峙していける意識や技術、レジリエンスと呼ばれる能力を獲得する事を目指していかなければならないと考えている。

そこで、PBL（Project Based Learning、プロジェクト型学習）を取り入れている本学薬学部動物生命薬科学科での博物館（学内）実習を、この課題を踏まえた学修の実践の場として捉えている。こうした授業スタイルは、大規模校とは異なって受講生数の少ない本学のような大学では大変有効であると考えている。

熊本地震は平成28年度の博物館実習初回を終えた後に発生した。この年度の授業初回である4月12日には、受講生達に次回の授業日である4月19日までに各自テーマを検討し、最終的に皆で議論して1つにしぼっていくと伝えていたが、震度7の地震はその間の4月14・16日に発生した。一週間という期間にこの大きな地震が2度も発生した事によって熊本とは阿蘇カルデラを挟んだ反対側の九州東側にある大学学内さえも騒然としてしまい、特に2回目の震度7の地震が発生したのと同じ日に＜日向灘でM6.9の地震＞という緊急地震速報（誤報）が発せられた事もあったので（気象庁 2016:6）、一時期パニックに近い状況まで発生していた。

九州保健福祉大学は大学博物館を持たず、コレクションそのものが限られている比較的新しい大学でもあるために、授業で活用出来る資料が限定されるというウィークポイントがある。これは展示制作を中心とした技術習得にはどうしても十分ではない。だが、はからずしも被災地という場所が大学所在県に隣接して存在するようになった事から、「次は自分達にも災害が及ぶ可能性が高い」という危機意識・感覚が学生・教員にとって高くなると同時に、大規模災害というトピックとそこから生じた様々な資料・情報への接触が可能になり、企画として作り上げていく経験を得られる条件を揃えられるようになった。

授業では、例年なら受講生が設定していくべき基本テーマであるにも関わらず教員が「災害」として指定してしまったものの、結果的にこれは被災地に近い地域に住まう彼等彼女等の学修意欲を高めるものとなったと感覚的には理解している。直接的に被災した訳ではなく、そうかと言って東日本大震災の時のように距離的にも感覚的にも遠いものではない。受講生は西日本、特に九州地域出身の学生が多いため、実際の大きな地震災害・被害に直面した経験を持っていなかった。局地性の強かった平成20年福岡県西方沖地震（2008年）の記憶がかろうじて残っていたり、保護者から阪神淡路大震災の経験を聞いた機会があるという程度に過ぎない。

その一方でこれまで体験した事がない揺れや（熊本地震では、大学の所在する延岡地域で最大震度4～5弱であった）、スーパーやコンビニから水や食料品が全く失われてしまった情景を自分達が住んでいる街において間近に遭遇したこのタイミングは、直接的に阪神淡路大震災を経験した近畿地方や東日本大震災を経験した東北地方の多くの大学が＜災害に向き合う社会とは何か＞を問うようになったのと同様、本学の受講生もこの課題と対峙する機会として相応しかったと言えよう。

そうした事から授業2回目の段階において、経緯を説明して当該年度の企画展示で災害をテーマとする事となった際も、受講生達は一様に納得していたどころか、自ら積極的に向き合う姿勢を見せるようになった。これ以後令和3年度まで、本学では「災害」を題材とした企画展示を博物館実習において実施する事となった。内容としては、「逃げる」・「避難所」・「復興」・「防減災」・「記憶の継承」といった現代の災害学習の中で扱われる様々な項目を取り上げている[3]（表1）。

表1: 企画展示テーマ（平成26年度～令和2年度）

平成26(2014)年度	キズク・延岡
平成27(2015)年度	森林(もり)からのメッセージ ～知ってほしい　ぼくたちの命
平成28(2016)年度	明日は我が身－揺れる心、揺れる大地－
平成29(2017)年度	災害がやってきた～避難所ってどんなトコ？
平成30(2018)年度	心災から心彩へ～私たちの心の復興～
令和元(2019)年度	変わったもの、変わらないもの －遊具からみた風景－
令和2(2020)年度	過去の災害の記憶を、未来へ活かす 2005⇒2020 ～台風14号から15年～
令和3(2021)年度	災害は備えあれば憂いなし 南海トラフ地震から生き抜くための道しるべ

2.展示に変化は生じたか

学内実習においては、以前から受講生達の「伝える」という活動への注力と学修効果を肌感覚で確認していたが、熊本地震以降の年度はそれに加えて受講生がより一層来場者への理解をはかるためデザイン性やギミックを含んだ展示の制作を目指した「技術の取得」にこだわるようになり、展示を作り上げるようになっていった側面があった。この理由としては受講生が熊本地震被災地と直接対峙する機会が設けられた事のみならず、東日本大震災や中越沖地震を体験した同じ大学の在学生から大規模災害の様子を聞いた事、さらには被災地熊本から「被災物」を借用して展示資料として扱った事等によって展示企画の意味・意義をはっきりと認識し、「つくる」と

いう行為の深化へと結びついた点が挙げられる（山内2017:23-56）。

早期の復興は誰にとっても望まれるものであり、被災地の状況が変わらないままであってはいけない。従って、災害発生年と同じような直接的なインパクトは翌年度以降の学修においては徐々に薄れていくものであるのは致し方ない。ただ実際の所、学修効果は年度を経るたびにどのように変化していったのだろうか。

令和に入ると、熊本地震のような直近での災害の空気感を感じるような体験は早くも希薄化した。正確には、大学入学以前に被災地となった地元で大きな地震を直接体験している学生もいる訳であるが、むしろ熊本以外の周辺地域での間接的な体験者の方が多い事を考慮するならば、1年、2年と時間的な経過が進展する事で災害への記憶は経時的に希薄化していったと推察される。さらにはまた、新型コロナウイルスの感染拡大による直接的な影響を受けた令和2年度の受講生は、実際の展示ではなく縮尺スケールによる模型という方法でしか展示表現を行えなかった事もあって、「つくる」行為に対する意識が低下してしまった可能性すら憂慮された。

このような災害の間接的な経験と時間的経過が、受講生の学修効果のうち、特に展示制作にどのような影響を与えたか以下に検討してみた。ひとまず受講生にとっての災害の経験と、自己評価について再整理を行った。

①災害の経験と理解

大規模災害そのもののインパクトは、受講生の展示制作に影響を与えていた可能性がある。何と言っても熊本地震の当該年度において、直接的ではなくとも大きな災害を肌感覚で理解した事は、受講生にとって「伝える」技術を深化させていく上で貴重であったと考えられる。従ってこの災害の経験は、これより以前の受講生と比較して技術向上に大きな役割を果たした可能性がある。一方で災害があった年度の受講生とそれ以後の年度の受講生とで比較していくと、この災害そのもののインパクト、さらに災害記憶の希薄化の傾向が生じていったと考えられる。

②フィールドワークの経験

被災地へのフィールドワークは、現場を生で観て被災者から話を聴くという重要な経験であり、これが「伝える」事に大きく影響していた可能性がある。災害が発生した当該年度と翌年度は、直接的に熊本地震被災地へ行く事で、視覚的な理解と傾聴の体験が受講生の「伝える」技術に影響したと考えられる。一方で、経年によって被災地の体験が希薄化していく事は免れない。ただ、被災地自体に訪問する事はなくとも、普段接していない「他者」からの直接の情報収集は、受講生間や様々な媒体から受ける情報に比べてより直接的な生の情報を把握出来、この体験を展示に活かす事が出来たと思われる。

次に実際に各年度の受講生において、上記のような大規模災害が受講生に与えた影響、さらには経年による意識の変化が実際に生じていたかどうかを検証してみた。

Ⅲ:学修活動実施とその効果

1.受講生の自己評価

毎年度の受講生にはa.授業各回の評価、b.展示企画についての評価（展示評価）、c.15回の授業回中3回の学修評価という3種類の評価を課している。

このうちa.授業各回の評価（ミニッツペーパー・リアクションペーパーに位置付けられる）は授業時間の最後に実施する事で次回の授業の目標とし、さらには翌週の授業時間の冒頭で前回の授業を再確認する事を目的としたものである。

c.の3回の学修評価指標では、経済産業省の「社会人基礎力調査」を活用している。この評価は学生のキャリア形成を目的とした内容のルーブリックである。この評価指標による分析の一部は（山内2021:6-10）にまとめている。

そして今回分析を行ったb.の展示企画についての評価は、企画立案－展示制作－実際の展示を経てからの最終的な評価を、受講生による自己評価を主体とし、さらに一部の年度では受講生間でのピア評価として実施した。展示制作段階における短時間での評価も行い作業にフィードバックさせているが、特に展示期間が終了して学内実習の締めくくりとして実施する評価は、受講生自身が自分達の行ってきた作業を言語化していく事によって、自己の到達点や後輩に向けたメッセージとして生の言葉が記述に残りやすい特徴がある。また、今回の分析には関係していないが、後輩にあたる学生達からも展示を見学して評価を記述してもらっている。直接の後輩達からのメッセージは、受講生が自身の学修の到達点を「いかに次につなげるか」という視点で再確認する事に関係してくる。

この「展示企画についての評価」は、受講生が理解しやすいようにアイデアを記述した付箋を模造紙に貼り付ける（あるいはオンラインホワイトボードで同様な方法を行う）シンプルなブレインストーミングの体裁を採っている。受講生は自分が「この展示企画で何を行えたか」

表 2: 各年度の受講生数とコメント数

年度	受講生数	コメント数（何を行えたか）	コメント数（何を目指せるか）
平成26(2014)	5	9	18
平成27(2015)	7	25	19
平成28(2016)	7	60	48
平成29(2017)	15	151	82
平成30(2018)	12	104	41
令和元(2019)	2	35	33
令和2(2020)	6	55	22
令和3(2021)	3	16	20
平均	7.1	56.9	35.4

（以下､「何を行えたか」）と「より以上に何を目指せるか」（以下、「何を目指せるか」）という 2 つの項目について、付箋紙一枚につき一つのコメントを記述していく。付箋紙への記述は枚数に制限を設けず、受講生がその場で思いつく限り書いてもらうので、受講生数とコメント数には各年度で差が生じている。

「何を行えたか」では､「様々な視点から「地震」「防災」を紹介できた」･「人にうまく伝えるにはどうしたらよいか考えることができた」といった、抽象的・概念的な目標から「パネルを立て掛ける様にする等少し工夫ができた」･「来館者の方々がわからないところは補足説明をした」のような一つ一つの技術の改善に関わる事項に至るまで、受講生にとって到達したと理解している項目が記述されている。「何を目指せるか」は、＜今回の企画では叶わなかったものの、次年度以降の後輩に向けて今以上の事にチャレンジするなら何をやるべきか＞を念頭に記述してもらった｡この項目では｢たくさん話し合う｣･「明確なテーマをメンバー全員で一致させておく」など、目標にあたる内容が記述される事が多い。

2.各年度での企画と展示について

a・b・c の 3 つの評価のうち、今回は最も情報量の多い <b. 展示企画の最終評価＞について分析した。方法は受講生が各年度の付箋紙に記述したコメントの記述内容の分類と傾向を年度毎に集計し、その変化を比較していくものである。なお、コメントについては授業時に記述を行った時点で匿名化している。

はじめに、この＜展示企画についての評価＞の各年度の記述内容についてみていく。展示企画の評価は受講生一人一人による自己評価を主とし、さらにそれとは別に他の受講者が自分以外のメンバーについての評価を行ったもの（ピア評価）がある。従って「何を行えたか」/「何を目指せるか」という 2 つの項目についても、自分自身で行った評価と他のメンバーによる評価の 2 系統が存在するが、ピア評価については途中で実施を取りやめたため、本論では省略した。自己評価については平成 28（2016）年度から、災害に関わる展示を実施しなかった令和元（2019）年度も含めた令和 3（2021）年度までの 6 年間の学校年度を対象とし、さらには災害をテーマとする以前の平成 26・27（2014・2015）年度の学内実習も含めて比較した[4)]。各年度の受講生数とコメント数は（表 2）に示した。

まず、＜災害＞をテーマとする以前の平成 26・27 年度のコメントの記述についてそれぞれ確認してみた。

平成 26 年度は＜まちづくり＞をテーマとした企画を実施した。受講生による評価「何を行えたか」（コメント数 :9）では「インタビューをうまく編集することができた」「展示に用いる情報収集ができた」といった自らの実践した活動そのものを評価する内容が挙げられたが、展示の造形的な部分は殆ど挙がってきていない。

平成 27（2015）年度は環境保全、特に陸棲の野生動物を対象とし､「ヒトと動物の共生｣をテーマとした。「何を行えたか」（コメント数 :25）では、「製作の段階で自分のアイデアを出すことができた」「企画を考えている際に動線に足跡をつかうよう提案した」「実際に、山や海に行ったときに、ゴミを集めることができた」「情報収集のときに、害獣について図書館で調べることができた」「パネル作成において、見る人の目を引きやすいようイラスト・写真・文（レイアウト）を考えることができた」「展示物を製作する段階で展示がかた苦しいものでなく楽しくみれる（ママ）ものに工夫できた」「ペットボトル植木鉢の模型をつくり、子供たちや学生に説明できた」等、前年度と比較するとアイデアから造形制作に至るまで、具体的な企画展示の完成像を一定程度把握しているのがわかる。

次に「災害」をテーマとするようになった以降、平成 28（2016）年度から令和 3（2021）年度までの 6 年間の学校年度を概観する。

熊本地震の発生した平成28年度の博物館学内実習では、＜災害から逃げる＞事をテーマとした展示を企画した。この年度では受講生による自己評価＜何が行えたか＞（コメント数 :60）での記述には、「益城町に行ったことで、考え方を広げることができた」「被災地に行って、インタビューできた」「よりリアルな現状を伝えるために調査に行った人だけでなく、他の人も映像をみて知識を共有化した」といった、被災地でフィールドワークを行った事が自分達の展示に大きく反映されたと見受けられる

記述が確認出来た。また、「何を目指せるか」（コメント数:48）では「被災者の声をより多く聞く」「もっと被災地に行って現状を見聞きする」といういわば＜あるく・みる・きく＞の実践をより多く求める記述があった。さらに多かったコメントとして展示制作技術に関わる様々な記述があった。一例として「ポスター作りのアイデアを出すのを手伝えた」「ダンボールベッド（筆者註：災害避難所で使用されるものを再現した）中の構造を工夫し頑丈に作ることができた」「伝わりやすい文章を意識してパネルを作った」等がそれにあたり、大規模災害の一端を具体的に体感して現状を確認した事が、造形制作の具体性にまで波及していった可能性が示唆された。

平成29（2017）年度は前年度の「逃げる」の次のプロセスとして、「避難所」にスポットを当てた企画となった。

「何を行えたか」（コメント数:151）では、「消防署に防災推進員がある（ママ）ことを知った」「案外、延岡の人の中でも防災について関心がある人がいることを知った」「お客さんの危機意識に大きな差があることを知った」「避難所内のペットの現状を知ることができた」といった地域社会における防災体制や意識の現状についてのコメントがあった。展示に関わる技術的側面では「展示品の手ざわりや、見え方などを考え、作ることができた」「キャプションは分かりやすく作ることができた」等の意見があった。また、「はじめてハザードマップを見た」「福祉避難所があることを初めて（ママ）知って、その使用目的を学ぶことができた」「2次災害（性被害）について詳しく知った」のように、この企画に関わるまで認識していなかった防減災についての諸情報・課題へのアプローチが確認された。

一方、「何を目指せるか」（コメント数:82）では、「子どものうるささや、それによる大人とのへだたりを表現できれば良かった」「男性が通りすぎている人が多かったので、もっと見てもらえるよーに何かができそう」のように展示表現のさらなる工夫に関する記述が多かった。また、「みんなに相談して物事を決めれば良かったのではないか」のような受講生間での人間関係に関わるコメントも比較的目立った。

平成30（2018）年度は「心の復興」を題材とした企画で、被災地の景観を一変させるインフラや諸施設の再整備の進行をもって＜復興＞と位置付けるのではなく、あくまでも心の問題なのではないかという「問い」をテーマとしたものであった。例年と比較して「気が済むまでみんなと話し合った」のように、受講生間での時間をかけた議論や合意形成について記載したコメントが多い。また、「インタビューをしたことで、震災当時の様子やどのように過ごしたかを知ることができた」など、現地で＜聴く＞事に関するコメントも多かった。

＜災害＞をテーマとしなかったのが、令和元（2019）年度である。この年度は受講生が限られていた事もあって、例年のような展示とは異なって＜公園からの景観の変化＞というテーマが題材として選ばれた写真展となった。

再び＜災害＞をテーマとした令和2（2020）年度は新型コロナウイルスの感染拡大が始まり、大学の授業もオンライン化が進行した。技術的な習得が必要となる実習・演習系の科目はオンラインでは難しい側面があるものの、ホワイトボードツールを組み合わせる等の工夫を行った事で、例年と変わらないコミュニケーションを目指した。ただし、実際の企画展示の実施は困難であったので、展示デザイン専門家の助言を得て建築のスタディモデルで使用される1/50スケールの展示会場模型を作成した。令和2年は宮崎県に大きな被害をもたらした平成17（2005）年台風14号の発生から15年目にあたり、大規模水害の記憶の喚起をテーマとした展示企画となった。これまでとは異なった手法で展示企画を進めたが、「通路の幅を考えながら模型を配置できた」「床と壁をくっつけるときに接着面を削った」等のコメントは、各自模型作成に集中して向き合い一つ一つのパーツ作成に時間をかけた様子がみてとれる。

同様に「自分は建築学科にいるのではないかと錯覚した」「模型を作るときどう表現するか考えられるようになった」のように、自らの学修活動への向き合い方の変化を明確に捉えている言葉もあった。感染状況に伴って授業期間中にオンライン⇒対面と授業スタイルの変化があったが、受講生間のコミュニケーションについても「作り方に困ったとき、お互い質問やアドバイスができた」「協力して模型を作成した」といったコメントがあった（以上、「何を行えたか」）。

一方で、「何を目指せるか」では技術的な向上の必要性についても目を向けていて、「色をもう少し実物に近づける」「模型をもう少し丁寧に作る」「もう少し話し合って動線をしっかり考える」といった点を明確に認識していた。突然発生したコロナ禍において果たせなかった要望にも近いコメントもあった。「実際に展示していろんな人に見てほしい」「模型ではなく実際にやったらもっと見る人に伝えられそう」という言葉は、担当教員としては身に詰まされる所でもあった。

令和3（2021）年度は、コロナ禍での学修形態もある程度慣れてきた感もあって、教員も受講生も対面／オン

表3:展示企画に対する評価の7類型(a～g)毎の回答数割合
(「a.何を行えたか」・「b.何を目指せるか」それぞれ各年度単位で記載)

a.何を行えたか

	a	b	c	d	e	f	g
2014	0.333	0.000	0.111	0.000	0.222	0.222	0.111
2015	0.160	0.080	0.320	0.080	0.200	0.080	0.080
2016	0.167	0.383	0.083	0.133	0.100	0.067	0.067
2017	0.081	0.362	0.101	0.195	0.128	0.128	0.007
2018	0.144	0.423	0.048	0.067	0.202	0.115	0.000
2019	0.057	0.257	0.114	0.114	0.200	0.114	0.143
2020	0.109	0.636	0.055	0.055	0.091	0.055	0.000
2021	0.188	0.375	0.188	0.125	0.125	0.000	0.000

分散分析　P-value is 0.0001

b.何を目指せるか

	a	b	c	d	e	f	g
2014	0.111	0.000	0.444	0.111	0.167	0.056	0.111
2015	0.053	0.000	0.263	0.211	0.105	0.105	0.263
2016	0.208	0.146	0.229	0.063	0.042	0.042	0.271
2017	0.159	0.293	0.159	0.049	0.171	0.122	0.049
2018	0.049	0.171	0.146	0.122	0.317	0.049	0.146
2019	0.030	0.424	0.121	0.242	0.152	0.000	0.030
2020	0.091	0.545	0.045	0.136	0.182	0.000	0.000
2021	0.100	0.500	0.150	0.100	0.150	0.000	0.000

分散分析　P-value is 0.013

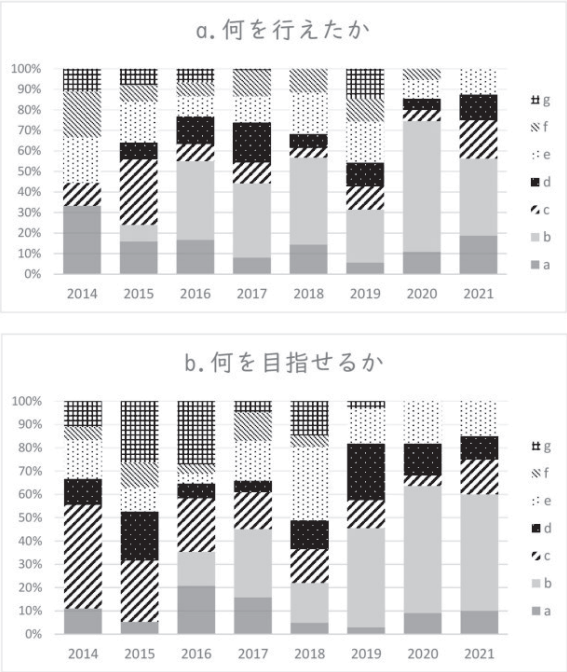

図 1: 類型毎の回答割合図
(「a. 何を行えたか」「b. 何を目指せるか」
それぞれ各年度毎に 100% の割合で比較した)

ラインへの切り替えに備えられる姿勢を持つようになり、学内実習を行った前期期間は終始対面での授業を行えた。

この年度は延岡市危機管理課の協力によって、市役所内の比較的出入りがある場所を展示会場として提供して頂いた。受講生が着目したのは過去の災害への理解と現状認識・対策であり、オーソドックスな内容ながら＜災害文化の伝承＞への視点を強く意識したものであった。

コメントについて確認してみると「ひな壇（筆者註：ひな壇状に成型した自作の展示台）を思い描いていたとおりに作成することができた」「ガレキを再現できた」「防災グッズ キャプション（名称）(ママ) の配置を工夫し見やすくすることができた」(以上、「何を行えたか」)、「文章を固すぎず短めにまとめる」「文章を強調する（必要な所)」「背景との同化を避け色を付ける」(以上、「何を目指せるか」）といったように、多くは制作技術やデザインにこだわった細かな視点が多くうかがえる。

展示を行ったのが市役所１階という集客には好条件のロケーションであった事もあって、受講生からは「多くの人に見てもらえた」「重さ体験（筆者註：実際の避難物資をリュックに詰め、それを背負ってもらう体験型の展示）をすることでよりリアルに避難時のことを考えてもらえた」「プッシュ型支援の再現展示をしたことで知ってもらうことができた」「避難経路の確認で「ここまで考えてなかった」と自身の着眼点について褒めてもらえた」という意見があった（以上、「何を行えたか」)。また「来た人に対する案内を積極的にする」「いろんな人の目線になって展示を見てみる」(以上、「何を目指せるか」）のように来場者からの視点・感想も多く含まれている。さらに、開催期間中に会場の一部エリアが新型コロナウイルスワクチンの自治体接種会場として使われる事が急遽決定したが、「突然の配置場所変更にもみんなで対応することができた」と、自らの対応力を高く評価しているコメントもあった。

このように各年度の受講生達のコメントをうかがうと、熊本地震の発生した 2016 年度以降実施している「災害」をテーマとした企画作成では、評価内容がそれ以前の年度と比較して、より展示制作やデザインに関わる技術的な視点を多く含む傾向がある。これは新型コロナウイルス感染拡大によって実際の展示が行えず、模型制作のみを実施した 2020 年度においても同様であった。

次にこれら各年度の評価をデータから確認していく。

Ⅳ:各年度での評価の分析

1.評価の類型と分析方法

これまでⅢ -1・2 で各年度の受講生の自己評価の記載（コメント）の概要を説明してきた。この自己評価について、以下の７類型に分類した（表３・図 1）[5]。

a. 協調性・合意形成力
b. 展示制作技術の習得
c. 伝え方の技法
d. 多様な視点の獲得
e. デザイン力
f. フィールドワークのインパクト
g. 効率化の技術

これら7つの分類は博物館における伝統的ともされる機能（資料収集・保管、調査研究、展示、教育普及）のうち、特に展示デザインに必要とされる基本計画から展示設計、展示制作（製作）等の各段階で求められる能力を項目としたものである。

この類型に基づいて「回答数の割合」「因子分析」「相関分析」「テキストマイニング分析」を実施した。なお､1）～4）はそれぞれ｢2. 分析の結果｣に対応している。

1）回答数の割合からは、各年度でのa～gの類型毎の割合の状況（変化）を確認した。また、これに伴って分散分析を行っている。

2）因子分析は回答数の割合の背景にある展示企画に関わる能力について、a～gの類型の潜在的な共通因（Factor）から探り出す事を目的として実施した。この因子分析及び次の相関分析にはMicrosoft R open Ver.3.5.3を使用した。

因子分析はa～gまでの7類型について、2014～2021年の各年度の類型別のコメント個数を用いた。因子の抽出には最尤法を用い、因子数をスクリープロットにより判断し、3因子としてバリマックス回転を行った[6]。

3）相関分析は、a～g各類型の関係性の強弱を確認する目的を持って実施した。

4）テキストマイニング分析によって記述内容の定量的な分析を行い、特徴的な言葉を抽出した。この分析にはKH coder Ver.3を用いている。まず、平成26（2014）年度から令和3（2021）年度までの全てのテキストを含んだファイル（｢何を行えたか｣/｢何を目指せるか｣）を使用し、意図しない語の分割を回避するために強制抽出作業を行った。この結果抽出された語を登録し、各年度単位で品詞別の上位語句を抽出してリスト化した（表6）。

2.分析の結果

1）単純比率から確認すると、平成26・27（2014・2015）年度では、a. 協調性・合意形成力・c. 伝え方の技法について高い割合を示しているのに対し、熊本地震の発生した平成28（2016）年度以降ではb. 展示制作技術の習得に極端に高いピークがあるのがわかる。これはⅢ-2で述べたコメントの記述概要と同一の傾向を示しており、展示製作に直接関わってくる技術的な領域に多く言及されているのがはっきりしている。ところが､fの「フィールドのインパクト」については必ずしも高くない。特に平成28～30（2016～2018）年度については熊本地震被災地に直接訪問し、被災地の状況を見聞きする経験を得ているにも関わらず、この類型が高くなる事はなかった。

平成28（2016）年度以降で災害に関わる展示を実施しなかった令和元（2019）年度の企画でも、bが高い傾向を示した。表2に示した通りこの年度は受講生数が少なかった事もあって、例年の展示と比較すると作業量が少なく済む写真展を実施した。

表3の展示企画に対する評価の7類型毎の回答数割合について、類型間（a～g）の分散分析の結果では「何を行えたか」/「何を目指せるか」のいずれにおいても$P<0.05$であり、各年度におけるコメント数に差があっても誤差の範囲に留まっているとは言える。しかしながら、限られた受講生数である事から参考程度として考えたい。

2）次に因子分析を実施した。その結果、表4で表されるように「何を行えたか」/「何を目指せるか」はそれぞれ3つの因子（Factor1～3）に分類した（因子負荷量が1に近い因子を抽出、小数点第3位で四捨五入）。

これらは、｢何を行えたか｣Factor1（展示に関わる情報収集と制作・デザイン能力）・Factor2（多様な考え方を理解し合意形成を指向する能力）・Factor3（伝える手法に関する能力）、｢何を目指せるか｣:Factor1（展示に関わる情報収集・伝達と制作能力）・Factor2（多様な考え方を理解し合意形成を指向する能力）・Factor3（デザインに関する能力）と類型化した。なお、それぞれのFactor3については説明する観測変数が少なかったと考えられるものの、因子数を2とすると他のFactorの説明が困難となり、3因子で判断した。

Factor1について、因子負荷量の傾向に「何を行えたか」ではb・e・f・g、｢何を目指せるか｣ではb・c・f・gと若干の違いがある。この違いはFactor3の差（｢何を行えたか｣では伝える手法に関する能力、｢何を目指

表 4: 因子分析結果(a. 何を行えたか ,b. 何を目指せるか)

a. 何を行えたか

	Factor1	Factor2	Factor3
a	0.195	0.973	0.106
b	-0.797	-0.377	-0.466
c	0.141		0.987
d	-0.125	-0.644	
e	0.775	0.174	0.172
f	0.797	0.316	-0.347
g	0.793		0.131

p-value is 0.000299

b. 何を目指せるか

	Factor1	Factor2	Factor3
a	0.136	0.878	-0.417
b	-0.997		
c	0.821		-0.135
d		-0.991	
e	-0.126	-0.112	0.983
f	0.661	0.204	
g	0.81		-0.287

せるか」ではデザインする能力）として表れている。しかし、Factor3 に分類した変数（c・e）以外の変数では、Factor1 では「何を行えたか」/「何を目指せるか」の双方で共通（b・f・g）し、Factor2 については「何を行えたか」/「何を目指せるか」双方で同じ（a・d）である。また Factor3 として抽出された類型はそれぞれ「c. 伝え方の技法」と「e. デザイン力」で、類型として近い内容である。そうした点から「何を行えたか」/「何を目指せるか」の因子はほぼ共通する内容と言ってもよいだろう。

このような事から、特に Factor1 の「何を行えたか」/「何を目指せるか」での共通する類型には展示をつくる作業の技術的な領域が、Factor2 では受講生間や関係者とのコミュニケーションに関わる領域が、それぞれ受講生達が挙げたコメントからみえる企画展示を構築し・運用していく能力として存在していた事が浮き上がってくる。

先の 1）で挙げた単純比率の結果と比較するならば、平成 24・25（2012・2013）年度には Factor2 の方が強く、平成 26（2016）年度以降は Factor1（のうち共通類型）の方が上回ったと見なす事が出来よう。

3）因子分析と同じ 7 類型についての相関検定（スピアマンの順位相関による）では、「何を行えたか」で b と c（-0.738）、b と g（-0.805）、e と f（0.778）、「何を目指せるか」で a と d（-0.881）、b と c（-0.874）、b と g（-0.855）の間でそれぞれ強い相関が確認された（小数点第 3 位で四捨五入）。「何を行えたか」の e と f は正の相関であるが、それ以外は負の相関を示している（表 5）。

b に対して、c・g はいずれも負の相関である。作業の効率化、多様な観点や伝え方の獲得といった点は展示制作作業へのこだわりを強く示し、それに反して作業効率を下げている可能性を示唆している。一方、正の相関を示しているのが「何を行えたか」の e と f である点も注目したい。単純比率の比較ではデザインに関わる項目とフィールドに関わる項目は双方とも高くなかったが、この相関分析では両者の間には強い関係性がある点を示している。

4）次にテキストマイニングによる分析を実施した（表 6）。上位語句を抽出してリスト化した際、年度で抽出される語数に差がある事がわかった。従って、表には基本的に各品詞で最低 2 回以上の頻度で登場している語を表示している。語の数が少ない年度では省かれているが、

表 5: 相関分析結果

a. 何を行えたか　method="spearman"

	a	b	c	d	e	f	g
a	1.000	-0.238	0.214	-0.262	0.168	-0.095	-0.049
b	-0.238	1.000	-0.738	0.071	-0.635	-0.524	-0.805
c	0.214	-0.738	1.000	0.167	0.168	-0.143	0.488
d	-0.262	0.071	0.167	1.000	-0.419	-0.190	-0.049
e	0.168	-0.635	0.168	-0.419	1.000	0.778	0.466
f	-0.095	-0.524	-0.143	-0.190	0.778	1.000	0.464
g	-0.049	-0.805	0.488	-0.049	0.466	0.464	1.000

b. 何を目指せるか　method="spearman"

	a	b	c	d	e	f	g
a	1.000	-0.204	0.524	-0.881	-0.310	0.317	0.228
b	-0.204	1.000	-0.874	0.060	0.347	-0.700	-0.855
c	0.524	-0.874	1.000	-0.357	-0.500	0.683	0.635
d	-0.881	0.060	-0.357	1.000	0.071	-0.342	-0.132
e	-0.310	0.347	-0.500	0.071	1.000	0.049	-0.383
f	0.317	-0.700	0.683	-0.342	0.049	1.000	0.565
g	0.228	-0.855	0.635	-0.132	-0.383	0.565	1.000

表 6: 品詞別の上位語句リスト

「a. 何を行えたか」「b. 何を目指せるか」のそれぞれのコメントについて、テキストマイニングによる品詞抽出を実施し、名詞・動詞・サ変名詞・タグのそれぞれ抽出数上位を年度別に並べた。

a. 何を行えたか

年度	名詞		動詞		サ変名詞		タグ	
2014					担当, 展示	2		
2015	段階	8	考える	5	展示	6	準備作業, 情報収集, 来場者	2
	自分	4	出す	3	説明	4		
	パネル, 模型	2	行く, 集める, 来る	2	企画, 製作	3		
					工夫, 提案	2		
2016	アイデア, パネル	8	出す	7	工夫	7	共振装置, 動線, 被災地	2
	ポスター, ワークショップ	3	作る	6	協力	5		
	ダンボール, 自分, 写真, 情報	2	考える	5	展示	3		
			行く, 切る	4	作業, 調査, 努力, 配置	2		
			貼る, 伝える	3				
2017	ダンボール, 写真	4	知る	27	防災, 話	4	！！	4
	イラストレーター, 空き缶, 災害, 作り方, 使い方, 市役所, 自分, 植物	3	作る	14	説明, 対応, 展示	3	お客さん, 高齢者, 避難所, 来場者, 両面テープ	3
			考える, 行く	6	協力, 体験, 配色, 表現, 予想, 予知	2		
			調べる	5				
	トラック, パソコン, パネル, ペット, ポスター, モノ, 子ども, 指針, 情報, 図書館, 石膏, 大学, 文字, 文章, 来客, 図書館, 石膏, 大学, 文字, 文章, 来客	2	見る	4			お米, フル活用, 手型, 性被害, 動線, 防災リュック	2
2018	写真	6	考える	14	展示	10	人型パネル	4
	ポスター, 手伝い	4			インタビュー	8	サバ缶, ペーパークラフト	3
	パネル	3			配置	6		
	カッター, キャプション, ジオラマ, チラシ, ポシェット, 荷物, 看板, 両面テープ	2			作成	3	スタンプラリー, トマトジュース, 展示作成, 展示説明, 来場者, 立体展示	2
					レイアウト, 扱い, 意見, 完成, 議論, 工夫, 説明, 担当, 納得	2		
2019	写真	13	撮る, 貼る	5	配置	4	学生課	2
	パネル	4			協力, 取材, 展示	2		
	ポスター, 公園	3						
	テーマ, 等間隔	2						
2020	模型	7	考える	8	展示	9		
	お互い, ダンボール, マネキン	2	知る	4	縮尺	5		
			作れる, 削る	3	計算, 作業	3		
					コピー, 一目, 工夫, 配置	2		
2021	ガレキ	2	見る	4	配置	4		
			考える	2	再現, 準備	2		

b. 何を目指せるか

年度	名詞		動詞		サ変名詞		タグ	
2014	自分	2	見る, 思う, 預ける, 伝える, 来る, 頼る	2	意見, 説明	3	展示室	2
					話	2		
2015	イノシシ, サル, ワークショップ, 写真, 動物	2	思う	4	説明, 宣伝	2	動線	3
			増やす	3			専門用語, 来場者	2
			作る	2				
2016	パネル, ポスター, ワークショップ, 写真, 全員	2	考える	4	作業	4	動線, 来館者, 聞く, 来る	2
			行う	3	確認	3		
			作る, 使える, 始める, 思う	2	アドバイス, 下見, 協力	2		
2017	消防署	7	聞く	8	展示, 話	8	情報交換	4
	スペース	5	見る, 思う	6	工夫	4	防災リュック	3
	子ども, 男性, 文字	3	作る, 置ける	3	体験	3	簡易トイレ, 高齢者, 自分達	2
	ご飯, アンケート, オブジェ, パネル, ペット, 情報, 大人, 内容, 部分	2			印刷, 準備, 表現	2		
2018	ワークショップ	3	考える	8	展示	6	立体模型	3
	パネル, ポスター, 看板, 最初, 写真, 文書	2	思う	3	説明	3	積極的, 置き場所	2
			決める, 貼る	2	工夫, 作成, 使用, 担当	2		
2019	写真	9	増やす	6	設置, 配置	2	来場者	5
	公園	4	撮る	5			動線	2
	ライト	3	使う, 置く	2				
	アンケート, パネル, ポスター, 移り変わり, 看板, 季節, 場所, 新旧, 地図	2						
2020	お互い, キャプション, 実物, 模型	2	見る, 増やす	3	展示	5	統一感	3
					説明	2		
2021	文章	3	見る	5	展示	4	プッシュ型支援, レジン	2
			届く	2	修正	2		

1 回の登場にも関わらず興味深い語が存在している場合もある。

また、品詞によって特徴が表れにくいものもあるので、ここでは < 名詞 >< サ変名詞 >< タグ（筆者註 : 複合語の品詞）>< 動詞 > を取り上げた。

品詞単位で各年度を比較すると、「何を行えたか」/「何を目指せるか」のほぼ全ての年度で「展示」という語が < サ変名詞 > で登場している。唯一サ変名詞で出現していない令和 3（2021）年度（「何を行えたか」）と平成 28（2016）年度（「何を目指せるか」）でも、それぞれ < タグ > で「展示物」（ただし 1 回の登場なので記載ナシ）、< 名詞 C>（固有名詞としての判別ができなかったもの）で「展示」として語が確認出来る。出現回数では各年度に差があるので比較する事が難しいが、「何を行えたか」ではおおむね展示企画に関係する一般的な語が抽出されている。一方 < 名詞 > や < タグ > ではそれぞれの年度に特徴的な、受講生が注力した展示内容に関わる語が抽出されているのがわかる。従って、令和元（2019）年度を除く平成 28（2016）年度以降では災害に関わる語が登場している。

しかしながら、特に < タグ > に着目すると災害に関わる語の登場は平成 28･29（2016･2017）年度と 30（2018）年度以降とでは差があり、後者では減少傾向にある。30（2018）年度では「サバ缶」（岩手県産）「トマトジュース」（福島県産）のように東日本大震災被災地で生産された対象を示す語を含め、まだ若干は検出されるものの、令和 2・3（2020・2021）年度には急減している。

V:分析結果をどう解釈するか

前章では単純比率の割合・因子分析・相関分析・テキストマイニング分析のそれぞれの方法による分析を実施した。ここではこの結果を解釈してみる。

単純比率の割合の結果からは、平成 28 年度からの「災害」をテーマとする以前と以降とでピークの違いが出ており、これは以降の分析の結果にも表れている。一方、平成 26 年度以降でも f. フィールドワークのインパクトが高くなっていないのは、被災地への移動に関わる物理的な制約もあってフィールドへ直接関与出来た受講生が限られているという事がある。従って被災地へ関与できた / できなかったそれぞれの受講生の間での認識の違いが大きかったと言えるだろう。

因子分析の結果からは、「何を行えたか」/「何を目指せるか」で Factor1（それぞれの因子は < 展示に関わる情報収集と制作・デザイン能力 >・< 展示に関わる情報収集・伝達と制作能力 >）のうち共通する類型である b. 展示制作技術の習得･f. フィールドワークのインパクト･g. 効率化の技術（これらを Factor1_dash とする）が、Factor2 の a. 協調性・合意形成力・d. 多様な視点の獲得が、2 つ因子を構成する能力として存在している点が明らかになった。これら 2 つの因子を単純比率の結果にあてはめるのならば、Facter2 が平成 26･27（2014･2015）年度、Facter1_dash が平成 28（2016）年度以降の因子として位置付けられ、単純比率の割合の結果とも共通する。2 つの因子と各年度の企画展示の関係について確認してみる。

Facter2 にあたる平成 26（2014）年度の企画が実施された頃、大学の所在する宮崎県延岡市の JR 延岡駅周辺の中心市街地活性化に関わる諸活動が活発に行われ、受講生もまちの動向に一定の関心を有し、展示企画につながった。一方で、大学を含む学生の生活空間と中心市街地とは一定の空間的距離があり、この事は学生の理解と地域社会との認識にずれを生じさせていた点を、筆者は過去に論じた事がある（山内 2013:103-113）。そうした意識のずれがありながらも「来た人と対話しながらまちづくりについての意見を聞き出せた」等の受講生のコメントからは、社会に関与する一人の人間としての自覚や地域社会への関心・地域コミュニティとの関係構築を強く意識していた事がわかる。

また、平成 27（2015）年度の企画は、大学に近い祖母傾山系の行縢山と、これを含む祖母傾国定公園における環境保全をテーマとした。野生生物に対してフィールド活動が限られていた事もあって、生物の具体的な生態像を自分達の調査レベルから反映させるまでには至っていない。例えば祖母山系に生息するヤマネ（Glirulus japonicus）の生息状況の展示も、諸テキストと野生生物を専門とする教員から得た知識に頼らざるを得なかった。それでも受講生なりに正確さと訴求力を持った展示を目指していた事はこの時（Ⅲ -2 参照）のコメントからもわかるが、因子分析の結果からは Facter2 にあたる因子負荷量が強調された。展示制作を進めていく中では受講生間のコミュニケーション、協同が必要となる場面も多く、こうした事情が Facter2 の因子に強く反映されたと言えるだろう。

Facter1 について、受講生が直接的に（ないしは直接に近いかたちで）災害を体験した平成 28（2016）年度以降では、展示を具体化する契機となる出来事の有無が、因子に大きく影響しているのが理解出来る。熊本地震の直後、宮崎県北部地域では水・食料が売り切れるパニック状況が発生し、大学周辺に居住する本学学生にも大きな影響があった。こうした経験もあって中越沖地震や東

日本大震災を直接体験した受講生の同期生や後輩、さらに熊本地震で最も被害が大きかった益城町に居住する被災者からインタビューを行う機会を得て、展示に反映させた（山内 2017:30）。

インタビューは同じ益城町の被災者に対して平成 29・30（2017・2018）年にも実施し、同 30 年には受講生の専門に近い動物園関係者に対しても行い、さらに大学の所在する延岡市の災害時対応について市危機管理室（当時）の協力を仰ぎ、専門官による講座を開催して自治体の避難所対応についての理解を深めた（山内 2018・2019）。

こうした直接的に災害に関わる情報を受講生がいわば「肌身」で収集した経験は、これ以前の企画と比較して展示を「観せる」事へ強いこだわりを持つようになり、その結果が Facter1 の因子負荷量の強調にも反映している。

類型毎の単純比率からは、この因子負荷量の傾向は災害をテーマとしていない令和元（2019）年度の企画でも確認された。同年度は少ない人数の受講生でも実施出来るように写真展示を行った。テーマは公園に設置された遊具から都市景観について考えてもらうものであった。遊具という限定された対象を被写体とし、写真展示という特化した手法で展示制作に注力した結果が反映されていると解釈出来る。

また、令和 2（2020）年度は新型コロナウイルス感染拡大のためオンライン授業となったため、実際の展示制作ではなくディティールに限界があるものの模型制作を実施した。この年度においても Factor1 が強く表れる理由は、災害というインパクトの大きな出来事が経過した後の年度においては、受講生のみならず教える側の教員にとっても授業での企画立案・展示制作ノウハウに関する一つのフォーマットが確立した可能性がある。

相関分析の結果からは、「何を行えたか」のデザインに関わる項目とフィールドに関わる項目に強い正の相関がみられた。フィールドに関わる項目には被災地を訪問して得た知識というものだけではなく、大学の所在する延岡市に住まう人々とのコミュニケーションや、自治体諸分野の担当者からのレクチャー、大学外での文献調査等も含んでいる。言わば受講者間のような近い関係性とは異なった、他者や異分野とのコミュニケーションによる情報収集を意味している。単純比較からはこの事がみえてこなかったが、相関分析ではこの＜フィールドに関与するインパクト＞が展示デザインに影響を与えている事が明らかとなった。

一方、「何を行えたか」/「何を目指せるか」双方で展示制作技術と効率化の技法の間で負の相関があった。展示制作への言及が増える程作業の効率が低下するという可能性であるが、確かに展示制作技術へのコメント数が少ない平成 26・27（2014・2015）年度では効率化に対する言及が多く、平成 28（2016）年度以降では明らかに逆転している。言ってみれば制作への＜こだわり＞がうかがえるようになったこの年度からは、反対に効率化についての言及が希薄になっている傾向がある。興味深い事に同じく「何を行えたか」/「何を目指せるか」の双方で展示制作技術と伝え方の技法の間で負の相関があった。一般的に考えると展示制作技術へのこだわりは伝え方のこだわりと強く関係する印象があるが、ここではそうした結果とならなかった。

最も理由として挙げられるのは、受講生に＜展示を観る側に立脚した視点＞が不足している点が挙げられる。本学の所在する延岡市には展示施設が限定されており、大都市圏に所在する大学と比べて学生が在学中に様々な博物館等施設を見学する機会が極端に限られている。比較的施設が多い宮崎市や大分市へはおよそ 100km、熊本市とも約 120km の距離があって交通事情もよくない。さらに大学博物館という、受講生が展示を様々な視点とタイミングで参照する事が出来る施設の欠如が大きい。そうした実際の展示を観る機会の少なさは地方所在の大学に共通する課題でもあり、本来、可能な限り機会を提供するのは指導する側の責務でもある。

次にテキストマイニング分析の結果を検討する。品詞別の上位分析の結果からは、特に＜サ変名詞＞や＜タグ＞といった品詞等の分類で各年度の企画において企画展示実施に関わる多様な語が抽出された。それは展示制作に関わる一つ一つの作業であったり、作業を遂行するためのコミュニケーションに関わる語であったりする。

年度間の比較では最も語が多い＜サ変名詞＞では語数の差が大きなため直接的な比較は難しいものの、＜タグ＞については平成 30（2018）年度以降、特に令和 2・3（2020・2021）年度に災害に関する語が急激に減少している。熊本地震以降も日本各地で大きな災害が続発しているものの、熊本地震時と比較すると実体験やメディアなどからの影響が希薄化している可能性がある。平成 30（2018）年度以降の受講生でも、自らの災害被災体験から獲得した家族の防災意識を展示に反映させたケースもあるが、受講生全体では実体験やメディアからの影響は減少している。

これまで論じてきた災害の間接的な経験を得た事による受講生の企画展示制作の変化について、特に「Ⅱ-2」

で予測した2つの仮説を今回の自己評価の分析結果から改めてまとめてみると下記のようになる。

「①災害の経験と理解」が、受講生の展示制作に対して一定の影響を与えていた。それは平成26・27（2014･2015）年度においては「協調性･合意形成力」･「伝え方の技法」が高い割合を示していたのに対して、熊本地震の発生した平成28（2016）年度以降では「展示制作技術の習得」に極端に高いピークがあるという単純比較の結果と、さらに因子分析においてもこれらが2つの異なった類型として抽出された点から理解出来る。一方でテキストマイニング分析の結果にみられる災害に関する語の減少からは、災害記憶が急速に希薄化していった事も明らかである。

「②フィールドワークの経験」と展示制作との関係について、相関分析の結果からはフィールドのインパクト（f）とデザイン力（e）との間で正の相関が確認出来た。この結果からは現場やそこに住まう人達、さらには防災に関わる専門家から情報を収集するフィールドワークは、受講生が展示をデザインするに際して強い影響を与えていた事が明らかであった。

Ⅵ:まとめ

我々は災害の実体験の記憶が思ったよりも早く忘れ去られつつあるのではないかというイメージを、阪神淡路大震災や東日本大震災から感じているし、だからこそ様々な分野において記録や記憶を遺す活動、意識の希薄化に抗した多様な取り組みが各所で実践されている事も理解している。一方でこの活動には膨大なエネルギーと強い意志が必要となる事実もまた、東日本大震災から10年を経て震災アーカイブが次々と閉鎖される問題（中川2022）等からも認識出来るだろう。このような状況を垣間見ながらも、何と言っても博物館は記録・記憶の収集と保存、これらの周知化にかかる活動の重要な拠点でもあるのは疑いなく、そうした使命を持った人材を育成していくのは学芸員養成課程を有する大学の役割でもある。

さらにはまた、博物館の活動領域は決して災害を後世に伝える事のみに留まらなくなっている事も理解しなければならない。学芸員養成課程のテキストからも災害に関わる記述が個々の館の防災対策に留まっていた時代から、2つの震災を経て文化財レスキューにまで拡大し、加えて熊本地震を経験した事で被災者の心のケアにまで及んできているのは、この事を物語っているとも言えるだろう。

加藤幸治は東日本大震災で被災した宮城県牡鹿半島の資料について、被災した民俗資料を東北学院大学博物館において応急処置・整理し、さらには展示活動をも実施してきた。これらのプロセスには同大の学生が参加しており、加藤は学生らが被災者達と語り、「モノを観察するだけではわからないデータの獲得という当初の目的だけではなく、民具から思い出されるふつうのくらしを意識的に集めていくのが意義深いという意見で盛り上が」ったと述べている（加藤幸2017:81）。このような直接的な、言ってみれば被災者との「深い」関係性を構築するに至った活動が、学生達に大きな影響を与えている事を示しているし､実際に加藤が「復興キュレーション」と名付けた展示活動は、回数を重ねるに従って単なるレスキューした民具の展示から人々の生活の風景を語る展示へと変化していったのが文中より示唆される。

直接的な被害からは近からず－遠からずの位置関係にある本学での活動は、そこまで被災地・被災者との関係性を構築するには至っていない。だが､被害がほぼなかった土地において多少でも感覚的な「揺れ」や普段なら当たり前に手に入る身近な生活物資がなくなるような物資供給の変化として認識できた災害が、120km離れた場所において大規模な災害となっていた事を同質性の高い仲間同士ではない「他者」とのコミュニケーションから再確認出来た経験は、学芸員養成課程受講生の行動変容につながっていた。

地域の様々な課題に関与していく事はもはや現代のミュージアムにとっては欠かす事が出来ないし、少なくとも日本列島に生きていく限り、我々は災害と対峙し、時には付き合いながら生活し、歴史を重ねていかなければならないだろう。もちろん災害に限られるわけではないが、大学は個々の研究分野の専門性のみならず、このような地域課題に関わり続けていく力を持った人材を育成していくべき役割を強く持っているものと、認識している。

註

（1）熊本地震時には、地域コミュニティへの関与は災害直後から複数の博物館であった。放送大学教材『博物館資料保存論』のコラムにも取り上げられた熊本市現代美術館では、自館も被災したにも関わらず住民の要望に応じ安全確認ができた所から迅速な再オープンを進めた（佐々木2018:38-41）。これによって市民は美術館への来

訪に「日常を取り戻せた」という感想を述べている。御船町恐竜博物館では避難生活でストレスが蓄積した子供達の心のケアの必要性を危惧し、「避難所の子どもの居場所作り」を実践した（池上 2017:2-4）。また熊本市動植物園では被災 1 か月後の 5 月 26 日から、子供達の心のケア活動として小学校・保育園幼稚園等を対象とした「ふれあい移動動物園」を推進した（熊本市動植物園ブログ 2016 年 5 月 27 日記事
「ふれあい移動動物園！」
https://www.ezooko.jp/imgkiji/pub/detail.aspx?c_id=28&id=678（2023 年 4 月 8 日参照、等）。

（2）筆者が学芸員養成課程を担当している九州保健福祉大学では、大規模災害時における資料レスキューの課題については博物館資料保存論の中で授業 2 回分を割いて実施している。内容としては東日本大震災やそれ以降の災害時における博物館の状況、各分野における災害時対応事例や組織化について、平成 17（2005）年台風 14 号災害・西日本豪雨災害など筆者自身が関与した被災時対応について等、被災資料（写真資料）の処理等を扱っている。また東日本大震災後には間接的な支援活動ではあるが、陸前高田市立博物館で所蔵している鳥羽源蔵関連図書資料の目録化について、山形資料ネットのサポートとして筆者が事務局を務める宮崎歴史資料ネットワークが支援した事から、本学学芸員養成課程の授業である博物館情報・メディア論の中で対応した経験がある（山内 2022:23-24）。

（3）展示会場は平成 26 ～ 28・30・令和元年は延岡市民協働まちづくりセンターギャラリー、平成 29 年はカルチャープラザのべおかギャラリー、令和 3 年は延岡市役所市民スペースである。コロナ禍の令和元年度については展示を実施していない。集客は企画展を行う受講生の学修効果にも大きく影響する可能性があるので、限られた期間でなるべく多くの方々に観て頂ける会場を手配する必要がある。

（4）ピア評価について、限られた授業時間の中で受講生がブラッシュアップに到達するのが困難となってしまうケースが多く生じ、平成 30 年度以降は実施を取りやめている。従って今回の分析対象としては扱っていない。

（5）例えばｂとｅの類型などには共通している部分も多いが、その場合「展示制作技術」には個々の制作に関わる技術的な内容が反映されている記述、「デザイン力」の場合は展示の全体的なデザインやテキスト作成に関わる部分についての記述、それぞれのウェイトが多く占めている方に分類した。

（6）因子数は通常、累積寄与率の 70% あるいは 80% で判断される。今回は、
「何を行えたか」:Comp.2=0.712,Comp.3=0.855
「何を目指せるか」:Comp.3=0.702,Comp.4= 0.855
であり、前者は 2 因子と 3 因子の間に 80% の境界があるので因子数を 2 と判断する事も可能であるが、ここでは後者に併せて判断し、3 因子とした。

引用・参考文献

池上直樹 2017「地域防災における博物館の役割」『全科協ニュース』全国科学博物館協議会 ,2-4
追手門学院大学広報課 2019「2018 年大阪府北部地震の被害を振り返り教訓に　博物館実習生による大阪府北部地震展」『プレスリリース』No.28
加藤幸治 2017『復興キュレーション　語りのオーナーシップで造り伝える " くじらまち "』社会評論社 ,81
気象庁 2016「平成 28 年 4 月 16 日 11 時 29 分に発表した緊急地震速報について」『「平成 28 年（2016 年）熊本地震」について（第 10 報）』6
中川透 2022「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）の取組について」『令和 3 年度東日本大震災アーカイブシンポジウム－震災記録を残す、伝える、活かす－』（発表資料）東北大学災害科学国際研究所
佐々木玄太郎 2018「文化による復興 地震の後、文化に何ができるのか」坂本顕子・岩崎千夏・池澤茉莉・佐々木・岡田直幸編『地震のあとで　熊本地震記録集』熊本市現代美術館 ,38-41
山内利秋 2013「中心市街地の伝統は継承されるのか：学生のまちづくり活動を通して」『九州保健福祉大学研究紀要』14,103-113
山内利秋 2015「学芸員養成における課題解決型教育」『博物館学雑誌』41-1,21-39
山内利秋 2017「博物館学教育で災害を伝える事―2016 年熊本地震を経て、これからの博物館に関わる人材の養成を考える―」『九州保健福祉大学博物館学年報』6,23-56
山内利秋 2018「災害の経過と博物館学教育 ―熊本地震から 1 年が経過して、隣接した地域は災害をどの様に考えるべきか―」『九州保健福祉大学博物館学年報』7,49-60
山内利秋 2019「災後と復興、学芸員課程から博物館の役割を考える―熊本地震の後、博物館が人々の心にどう関与したかを考える―」『九州保健福祉大学博物館学年報』8,62-76
山内利秋 2020「西日本豪雨災害における写真の救済と

その意義－市民レベルでの資料保存を目指して－」『九州保健福祉大学博物館学年報』9,23-34
山内利秋 2021「オンラインツールを活用した学生間の合意形成プログラムについて」『博物館研究』56-11 日本博物館協会 ,6-10
山内利秋 2022「宮崎歴史資料ネットワーク」『地域歴史文化継承ガイドブック』, 文学通信 ,229-232
龍谷大学博物館準備室 2022『わざわいと人々～安寧来たれと願う今～　二〇二二年度 龍谷大学文学部博物館実習十二月展』